



特集

鳥取環境大学 開学10周年 記念座談会

平成13年の開学から10年目の節目の年を迎えるにあたり、これまで本学を支えてきた4氏に、それぞれの立場からこの10年を振り返っていただき、これからあるべき本学への熱い思いを語っていただきました。

出席者



鳥取環境大学
理事長

八村 輝夫

Hachimura Teruo



鳥取環境大学
学長

古澤 巖

Furusawa Iwao



鳥取環境大学を支援する会
会長

清水 昭允

Shimizu Terumitsu



鳥取環境大学同窓会
会長

田中 衛

Tanaka Mamoru

司会

鳥取環境大学事務局 次長

加藤 哲史

katou Tetusi

開学10年を振り返って

加藤：鳥取環境大学は今年で開学10年という節目の年を迎えました。開学当時の様子や、これからの鳥取環境大学への思いについてお話しください。

八村理事長：当時、鳥取県には大学が一つしかなく、大学進学率も非常に低いことから、公立大学を作ろうという運動がありました。公立と私立の良いところをとって公設民営の大学となりました。「環境」が世間から注目を浴びてきたこともあり、環境をテーマに世界をリードして働ける人材を作っていこうということから、京都大学の沢田総長を委員長として大学設置準備委員会ができました。文部科学省と鳥取県、鳥取市が中心になり著名な先生を集めました。設置に当たっては色々な意見があり、「少子化に向かうなか厳しいのではないか」という意見もありましたが、賛成する人達も多数おられました。

開学当時、私は大学も民間の会社と同じで、企業という管理部門が事務局とすると、生産部門、あるいは営業部門が教員組織であろうと

思っていました。実際には完全な独立組織になっていました。また、教育は世間に公表したのだから開学後4年間の変更できないということもあり、非常に動きが鈍いと感じました。色々と分かっていく中で、もっと事務局が勉強しないとけないといつも思っています。

現状の学生確保が厳しい理由としては、18歳人口が減ってきていることと、大規模大学が18歳人口の囲いこみを始めているということがあります。また、東京と地方の格差が大きくなってきていることも一つの要因と考えています。そういった中で地方の小規模大学としては、他大学と差別化できる特色を持たないと生き残っていくことができません。公立大学も一つの大きなブランドになると考えています。

これからは、本学の特色として10年間培ってきた環境分野をもっと専門的に掘り下げていくことや環境分野で世界をリードしている先生に指導を受けて、学生たちが先頭になり活動を展開し、社会的・世界的な問題で鳥取環境大学の名前が新聞やテレビに出てくるようにしていきたいと思っています。それが大きな将来の構想であり、小さな大学でも十分出来ると思っています。

加藤：鳥取環境大学を支援する会会長として、開学前の鳥取環境大学に対する期待はどのようなものでしたか。

清水会長：当時、私は鳥取市の小中学校のPTA会長をしており、高校卒業後の進路について、教育関係の中でよく話をしていました。昭和55年前後から地方でも大学進学率が高くなってきて、その頃から県内大学に子供行かせたいが、鳥取大学は教育学部、農学部、工学部、医学部以外の選択肢がないということか





ら、県内にもう一つ大学がほしいという声が出始めました。県、市でも色々な議論が交わされるようになり、平成6年頃から大学設置について経済会が決議し、県や市に陳情しました。これを受けて県や市は、準備室を設け、平成8年に鳥取県に公立大学を実現する会を作りました。やはり21世紀は環境がキーワードだろうということで、平成8年7月に名称変更をして鳥取に公立の環境大学を実現する会ということが決まりました。平成9年3月には県と市が、公設民営で新大学設置に正式に取り組むと表明がありました。

実現する会は、会員を募集して積立金を作り、鳥取市にそれを寄贈しました。環境大学を作った時の奨学金として、優秀な学生に経済的に支援できるような環境も必要だと考えたからです。また、開学前に県内の高校を大学の先生と一緒にPRに回り、学生募集をしました。少しでも環境大学に関心を持ってもらいたいという気持ちがあったからです。

現在、1期生2期生をはじめ、卒業生が県内で色々な所に勤めています。そういう人たちが会社の中の重要なポジションになっていき、地域を盛り上げてほしいと思っています。

加藤：学長は、就任されて6年目になりますが、これまでを振り返った感想をお願いします。

古澤学長：就任当初、環境を中心に教育する大学ということで、非常に興味深く感じました。就任後5年間というのは学生確保をどうするかに始終した期間でした。色々なことを試みてもなかなか学生の充足はできなかったのですが、それでもやはり教育や研究の部分をしっかり作っていくというのが重要だと思っています。専門教育はそれぞれ先生がおられるので、大学の最初の2年間の教養教育を強化するために、人間形成教育センターを作りました。平成17年4月には大学院を開設し、さらに平成21年4月に環境マネジメント学科を開設しました。

また、研究面で大学を広報していくことは大切であると思い、就任してすぐに学長直轄型の5つのプロジェクトをスタートしました。現在、その中の2つが今でもまだ動いており、それが昨年のサステナビリティ研究所の開設に繋がっています。これから研究を通して、地域に色々な提言をしていきたいと考えています。

加藤：田中さんは一期生としてこの大学に入学しましたが、大学生活の4年間はどうか。



田中同窓会長：生まれは鳥取市ですが、育ったのは兵庫県西宮市です。環境に興味を持ったのは、高校2年生の夏に読んだレイチェルカーソンの「沈黙の春」がきっかけです。鳥取環境大学が新設されることを知り、1期生として新しく大学を作っていくことに興味を持ち入学しました。大学生生活を振り返ってみると、クラブ活動で地域に出て活動した思い出が非常に印象深く残っており、充実した4年間を過ごせました。それとともに若者が、都市部に流出する地域の問題を考えさせられるきっかけにもなりました。いろいろお世話になった方々に恩返しをしたい気持ちでいっぱいです。

大学改革検討委員会

加藤：さて、清水会長には学生確保に向け、大学改革検討委員会委員長として2年間ご尽力をいただきました。2年間を振り返り、感想をお聞かせ下さい。

清水会長：大学改革検討委員は各分野の経験豊富な方々で、環境大学を県民として支え、開学当初の賑やかさを取り戻したいという気持ちがあったのだと思います。委員長としては、できるだけその気持ちをまとめることにエネルギーを費やしてきました。

この大学の課題は、県民の大学であるということ地域の方に認知していただくことであり、保護者や高校の先生の目を環境大学に向けていただく努力を根気よく、粘り強くやっていくことだと思います。鳥取県中西部の方にもどんどん環境大学に目を向けていただくようにすることが必要だと、委員会の中でも感じました。最終的には県と市の行政側で判断しながら進



めていくのですが、その素地を盛り上げていくことが、大学関係者の皆さんが努力されることだと思います。

同窓会の活動

加藤：同窓会長として、今後どのような活動をしていきたいとお考えですか。

田中同窓会長：大学の現状を卒業生に正確に伝えるのが今の私の役目だと思っています。この大学を大切にしたいという卒業生はたくさんいます。そういった人たちの気持ちを束ねるようなことをしていきたいと考えています。そのためにも、全国に散った卒業生をまとめる地域毎の部会の結束力を高め、異業種交流や卒業生同士の仕事の繋がりなど、色々なところで大学の名前が挙がる機会を作っていきたいと思っています。

大学の魅力作り

加藤：次に、鳥取環境大学の魅力作りについて伺います。

八村理事長：豊かな自然に囲まれた鳥取の特徴を生かした学生活動やフィールドワーク、地域を巻き込んだ課外活動など、若い人にとって本学は非常に魅力的だと思います。また、教員にリードしていただければ、面白い活動が出来ると思います。それが一つの売り、特徴だと思います。

清水会長：支援する会のメイン事業は、大学生生活の向上や地域社会へ貢献する優れた企画を



実施する学生団体（P11参照）を表彰する環大コンペです。これは、学生が様々な発想で色々な取り組みをしていくことがいいと思っています。それぞれの分野に精通した多数の先生がおられるから、環境大学として特色のある事業に取り組んでみる。それに対して、環境大学らしい成果を

発表する、そうするとマスコミも取り上げてくれると思います。斬新なアイデアで、今の時代が求めている政策提言や研究をしていただいたら、特色がもっとはつきりしてくると思います。

古澤学長：魅力ある大学とは学生が集まるかどうかで判断できると思います。鳥取県東部では地域活動をやっているとわかりますが、鳥取県中西部ではその活動の姿が見えません、県外にいたってはなおさらです。大学のある場所での地域のみなさんとの協力活動と明確な活動の柱を何本か出すこと。これがないと大学は分かってもらえないと思います。

開学して10年間経ちますが、なかなか社会に提案する政策が出て来なかったのが、今後は、対外的にアピールが出来るよう、柱を立ち上げ政策を出していくかが勝負どころだと思います。

田中同窓会長：この大学の魅力は、自由度が高い、海、山、川などの自然が近くにあるフィールドワークしやすい、地域の方が親切で受け入れてくれる体制があるというような、都市部と違う活動しやすい場所があるという点です。しかもメディアがすぐ取り上げてくれる、そういったところが魅力だと思います。また、先生との距離も近く、24時間自由に使える学習室がある環境も大きな魅力の一つです。

清水会長：環境大学の事務局、先生、学生を巻き込んで、環境大学らしい生活の仕方を試して



みるというのがいいと思います。大学の中で先生と学生が色々なことを実践して、CO₂排出量をいかに減らすかということに取り組めば、より分かりやすく魅力ある大学になると思います。昔の人はCO₂を出してなかったわけですから、それにいかに今の生活の中で合理的に近づけていくかという発想、そういう取り組みを環境大学がするというのはすごくいいと思います。そういうのができると、あそこは面白いことをしているのでもう少し専門的に欲しいとか、専門性を持った学生を送り込んで欲しいとか、その辺を、特色として表すような物事をしていったら、夢があるなあと思います。

本学の地域貢献

加藤：地域貢献に関して、卒業生にどのような事に期待をしていますか。

清水会長：1期生が出てから6年、グループリーダーなど部分的には社会に貢献しつつあると思いますが、その貢献度が社会的にアピールしているかといったら、まだ出ていません。企業は出来るだけ早く若者にチャンスを与え、そのチャンスの中で自分の力を発揮することが大切です。やはり、グループリーダーになり監督職になると、自分の力を発揮できることになるとは思いません。これからが楽しみということで捉えています。

10年後の鳥取環境大学

加藤：最後に理事長、学長に10年後の鳥取環境大学について伺います。

古澤学長：日本の中で環境という冠が付いた大学が作られたのだから、これはずっと残していきたいと思います。本学の理念である「人と社会と自然との共生」の共生という言葉は、10年前だと意味をなしていませんでした。ここをしっかりと残して、その3つがどういふふうに共に生きられるのかを考えられる大学を作って行きたいと思っています。そのために何をやっているのかを発信していき、共生という言葉の完成を目標としていきたいと思っています。その結果として、共生という言葉がこの大学でしっかり根付いてきたら、他の大学との差別化になると思います。

八村理事長：次代を担う若者が、本学に入学し、そして卒業して本当に良かったと思えるような大学を作っていきたいと思っています。特に、専門知識の修得はもとより、自主性や問題解決能力を高めるとともに、教養教育に力を入れ、社会に出て、さすが鳥取環境大学の卒業生だと言われる社会人を輩出していきたい

と考えています。今後は、地域や企業など社会のあらゆる面で役に立ち、貢献できる人材を養成する大学を目指したいと思っています。

加藤：本日はどうもありがとうございました。



鳥取環境大学10周年記念事業

開学10周年を記念して、年間を通して様々な行事・事業を予定しております。

1：記念行事

- | | |
|-------------------------|--|
| (1) 記念式典 | 日時 平成22年6月19日(土) 13:00開会
場所 本学11講義室
内容 挨拶：理事長、学長、知事、市長、他の式辞 |
| (2) 記念講演会 | 同日、同場所 14:00~15:30
演題 「変動帯に生きる」
講師 尾池 和夫氏；(財)国際高等研究所所長、日本ジオパーク委員会委員長、京都大学元総長 |
| (3) 記念祝賀会 | 日時 平成22年6月19日(土) 15:50開会
場所 学生食堂 来賓、教職員など約200名参加予定 |
| (4) 活動パネル展示 「開学10年のあゆみ」 | 日時 平成22年4~6月
場所 本学情報メディアセンターギャラリー
内容 開学以来10年間の活動写真をパネル形式にして展示します。 |

2：同窓会、ホームカミングデー事業

- | | |
|----|-----------------------------|
| 日時 | 平成22年10月予定 |
| 内容 | OB、関係者らが集い、意見交換ならびに親睦を深めます。 |

3：10周年記念環謝祭事業

- | | |
|----|-------------------|
| 日時 | 10月23日(土)~24日(日) |
| 内容 | 学生が主体となり、内容の充実を図る |

4：サステナビリティ研究所拠点施設整備事業

- | | |
|----|---------------------|
| 日時 | 平成22年度中完成目標 |
| 内容 | 木造平屋建て225㎡の新たな施設を整備 |